

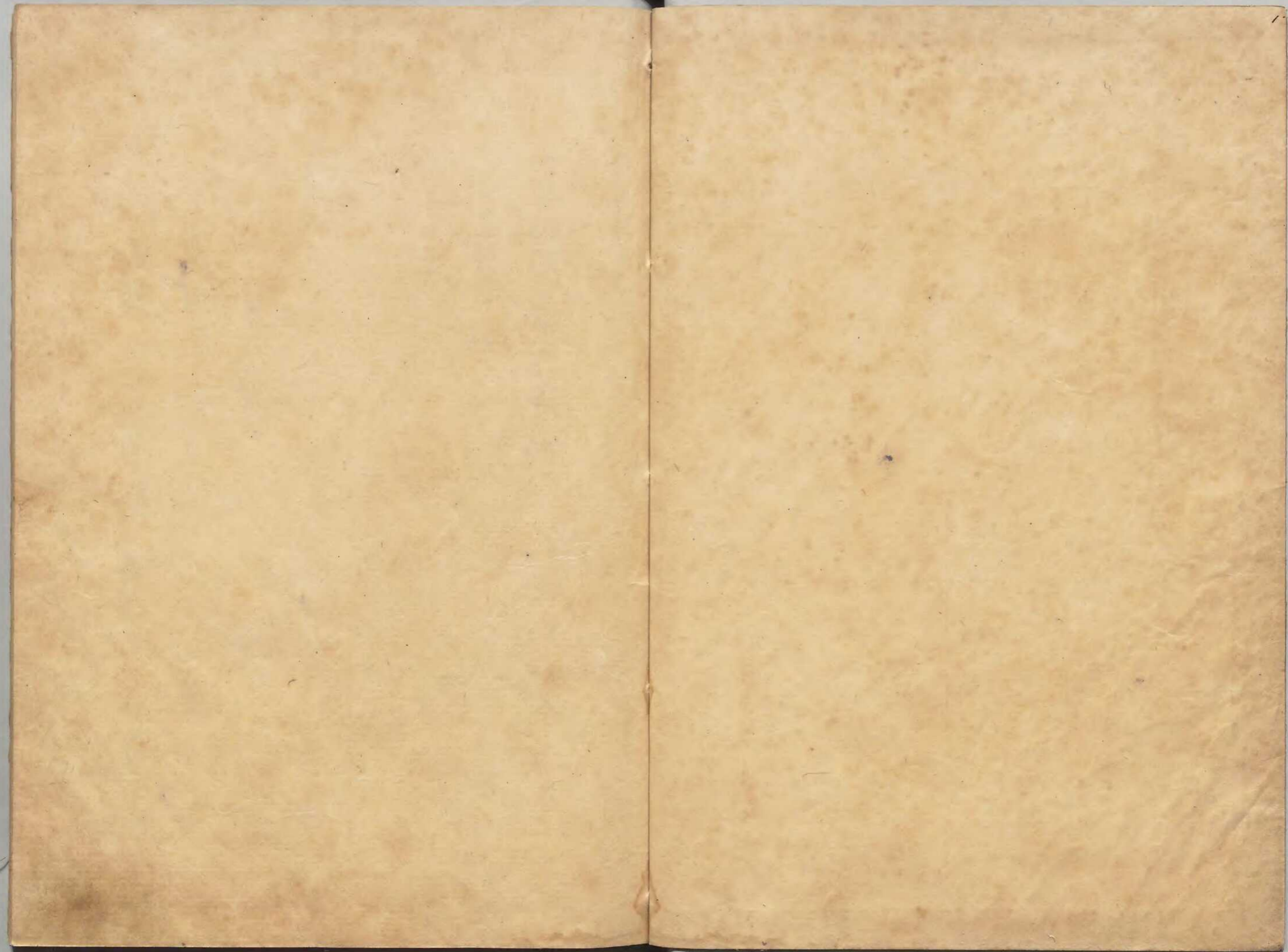
寛永諸家譜

三枝部氏

173

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (173)		
函號	特	76	1





三枚

野呂

寛永詔家系圖傳

三枚部姓

三枚

寛永三庫

● 守國

大宰大貳

家傳

仁由天皇乃御宇

異賊數多執けふよ詔書まことり皇位を

篡りす 帝特り敵慮と爲る

詔旨とありしをこれと議しきまふ
余よみありしより異賊と退治され
た先祚の威と傷人のくらしこと
あれしはけぐ祚ごとくを祚と
まらせらるべしと云ふなり
と云と納勅使とハ情まじりけり
勅使七日参勤し伏し丹波と抽つ
七日し海より長祚の示現し
いづく世に祈りて民乃きしめ

懇情を深しかの徒と追討せんよせハ
丹波國も持まき大女ちとつひかのされ
良維し敷國の柘をり校あり
こま乃之股の中し童子あり
し彼童子とつゝ大將軍也作
異賊追伐せしむべしと云ふなり
則使者と丹波しけりしを
きりし果ちし十歳よりり乃
希子ありし勅使希子と推し禁裡し

久保 帝^{てい}ふれを^ぶいふ^らこ^び給^ひ
ら^くた^れを^めし^物し^く子^細を
回^こま^まし^帝子^教の^いん^す
帝^いよ^く怪^お再^ま童^こ子^よ回^こま^ま
う^うし^しい^く帝^こ子^らう^うし^しの
指^さと^喰切^き之^血を^りり^く書^して
い^く我^れハ^幡人^美之^乃嚴^命と^交
異^賊追^伐の^の天^{より}降^り馬^り
使者^{なり} 帝^も之^を回^こま^ま
帝^も之^を回^こま^ま

信^え敬^{けい}を^切な^を即^ち大^長し^しに^かせ^て
帝^子と^養育^せし^に既^して^帝子^に
成^長し^く身^の長^七尺^許形^似貞^凡
人^に類^せし^帝 帝^殿覽^あり^て
ふ^ふし^した^れと^奇なり^と志^強ひ
し^した^れ乃^姓を^まし^たれ
板^木之^股乃^肉を^お生^せし^まる^を
く^かり^しを^守國^とし^けま^まふ
天^國家^を守^護の^しめ^れと^降し^て

掩へたるをうらみち異賊まゝに大軍
と率く執せしむるに 帝守ま
をうらみ大軍少く教方乃宿
兵と發し執せしむる下向と異
賊しきり數十方誘乃兵をうらみ
海陸あ道し海橋をうらみ守國
えりしをうらみ大し海
款と碎けり大風沙と吹波を
揚異賊乃兵船と源没す陸と走

のき火と發ししれと討九列一
河し静澄し守玉洛陽し
うられ 帝大よ軍切と發ししれ
播磨はよしし地と守ま
ま異賊と防げんがしめ太宰大貳
下し補せらる敷のしら揚列よ
里と洛しと泰月と 新顔し
震ししと忠誠とうらみしし
禁中宿直乃書をほめしし

罪乃らういかりきあれと擧せハ若政
の弟一たらんもいふ酒衣の云知
之理一服一すそた養同せん
也とら河守出すみくいそ切家
侍人の例一しきせを流よあせ
らる一とあり云御まては議よ
曰一守出と帝部とが一甲列
東郡能治よ配流とそわら守出
甲列在廳乃文祖とそなり柏尾と号

一次一三枚也号す柏尾寺を建
之一一枚氏の一人あれを宗
守國道田氏が新とそなり男子五人と
いふ也孺子を野呂守保二男を
立河守忠之男源男守継四男
林部守守黨と号す
長徳四年九月十九日一率一と
百六十歳孺子守保を跡とらき父
守出と号く一枚の神よ宗守板本と

植之下ノ一庵と建歳これと
糸今ノ一主まゝくちと甲列
東郡三枝の糸これと

今按ノ一姓戸録よしく三枝
部の連天津老根命十四世の孫
達己品命の孫也 耶系天皇
乃沙守徳氏と何つめ郷倉藤を
きしまふと記ノ一宮庭ノ一三笠
の葉ありとされと献とよう

姓と三枝部の連也まふ 耶系の
沙守異織とノ一まゝくちと一
け祝符命せとといふとこれと書
ノ一参考ノ一くまふ

守將

野呂介 生玉甲斐東郡

守久しゅく

野呂介のろのしや

守内しゅない

野呂介

守氏しゅし

野呂介

寛光くわんくわう

柏尾寺法師かしらのおのり

実ハ守内じつはしゅないの四男

寛海くわんかい

玄養坊げんやうぼう

長後ちやうご

秋宗坊あきむねぼう

実ハ寛海じつはくわんかいの弟

守長しゅちやう

野呂介のろのしや

守泰しゅたい

野呂介

盛也もり

野呂介のろのり

盛迹もり

野呂介

盛秀もりひで

野呂介

系盛けいもり

野呂介

系氏けいぢ

野呂介

盛政もりまさ

野呂介

盛親もりちか

野呂介

守家もりいへ

野呂介

守春もりはる

野呂介

守敏系もりとし

野呂介

守久もりひさ

野呂介

守久もりひさ

野呂介

守綱もりつな

三枝丹波守えいさだんべのしゅ 法石道見はふしちみ
是より先累代甲列東郡の臣人これよりさきついでにゅうけつとうぐんのおみひと

虎吉とらきち

源八郎 大邊尉 生玉甲斐
信虎とよび晴信よつふ信虎より
諱の字をそまふ

村と義清也晴信信列むらとよきよやはるのぶのぶのぶ
て合戦の河晴信一房一殿あはせのかわはるのぶいつぶらいつとみ
兵を収くや一房へいをさくくやいつぶら
まゝ義清と晴信同必和利加嶽まゝよきよとはるのぶどうもくわしりかたけ
とひく合戦の河款也銀首級とひくあはせのかわくちやぎんくびぐわい
事こと
小糸氏武田と拒こいすぢたけだつとこはる
と野五前ののいつまへの城のしろとまとま
勝頼大守と帥かつらうたいまもりとすし
とせとせとせとせ

河虎名一基^{くわこ}一^{いち}城中^{じうちゆう}入^い

天正十年甲列没落^{てんていじゅうねんこうれつぼつらく}のとき虎名^{こな}

也^や若田^{わかた}大清^{おほしやう}尉^{ゑい}と駿列^{せんれつ}田中^{たなか}の城^{じゆう}

守成^{まもりなり}濃右^{のうゑ}大清^{おほしやう}尉^{ゑい}甲列^{こうれつ}より飛脚^{ひやく}を

馳^は勝^{かつ}於^おしらたの^{らたの}と^とは^は行く^{いく}河^か

奇^き子^こ夫^ふ又^{また}を^を城^{じゆう}中^{ちゆう}に^に付^つあ^ある^る言^{こと}

い^いく^く勝^{かつ}於^おしらた^{らた}の^のと^とは^は見^みえ^えは^は城^{じゆう}を^を渡^{わた}

河^かと^とま^まり^り河^かに^に穴^{あな}山^{やま}梅^{うめ}雪^{ゆき}ま^まる^る

江^え鹿^か乃^の城^{じゆう}を^を守^{まも}り^り使^{つか}を^を馳^はく^く急^{いそ}

城^{じゆう}を^を渡^{わた}る^る一^{いち}中^{ちゆう}に^に昂^{たか}城^{じゆう}を^を用^{もち}き

た^たれ^れと^とま^まり^りす^すこ^この^のと^とは^はし^しく^く

若^{わか}田^たと^とま^まり^り虎^こ名^な甲^{こう}列^{れつ}市^{いち}川^{かわ}の^の敏^{びん}

東^{とう}照^{しょう}久^く指^{さし}現^{げん}一^{いち}湯^ゆ一^{いち}を^をて^てま^まり^り

不^ふが^がせ^せ一^{いち}と^とま^まり^り後^ご列^{れつ}藤^{とう}枝^え

本^{ほん}雲^{うん}与^よ一^{いち}隠^{かく}る^る一^{いち}と^とま^まり^りま^ま

信^{のぶ}長^{なが}甲^{こう}列^{れつ}一^{いち}入^い国^{くに}中^{ちゆう}の^のま^まを^を搜^{そう}索^{さく}

悉く之を折放し 沙内をとり
く珠列し 信長薨逝のち
奉書を虎谷昌高より 治り
めし 珠列相良より 治り

日永六月

大指現甲列より入るまは河津福

小糸も河津陣のとき 釣命を

かきぬると方止十二騎は将止十人

あつちられ甲列東郡大野のち
と守系虎谷内友三平松平玄蕃元
也同水出の申し あり鶴淵に
初麻口薨坂に ありふれぐけ時
之是勅解申右藩門守友が地并
同公前のもく虎谷より 作
陣代也かこし
小糸の共是るや 小糸あり初麻口
了お法し 勢と近郷し 振

虎名安内をいりりよるり共と發
— 並同を遊將して甲列陣證と
大指現為大守り— ま— ま— 河小
虎名守友の嫡子長共清守台と推乃
成敗名を為つと先考ゆ— 告— 告—
守名知あ— 守友の跡職
— ま— 知あ— 知あ— 知あ—
伯父年太の昌名と陣代とふらん
たふ

大指現虎名り指— ま— せ— せ—
指い本銀子七百十貫八百文と指り
并— 同公五十六騎とわつけら
昌名陣代とたふ
日十二月十五日— 死とゆ—
七十三 法名兼富齋玄玖

守新

伯母守

守之

立席 右表の尉

守丞

新十席

女子

大木 同情 守の妻

守友

系回席 勘解由 左邊の尉 存 若 左邊の尉
生 五 甲 装

十八歳の河崎屋の勘氣とく物でして
若 左邊の尉 上列 惣社 乃 堀とせめん
也 する 若 乃 左 小 道 原 交 店 として
若 左邊の尉 乃 左 小 道 原 交 店 として
若 左邊の尉 乃 左 小 道 原 交 店 として
と けり 守 友 一 也 子 乃 左 邊 乃 尉 として

翌日カ我首級とぬきりすふくら

ついでに

越後の諸侯と列し一殿

橋の城し居と晴信とよび小泉

氏政原橋しし新利根川を

こえ城下ししし挑すくふ

守友晴信の眼前ししし教度

歎しし南く麻とく京公我と

しり利根川とこゆり守友馬死

しをる河し晴信より樂山葦

毛ゆい駿るししまふ

信玄駿列氏夫乃城花浜とせりし

河邊子口しししをあらを麻

とくしあまう大隅世輪いまふ

おらす守友侵節とるし攻地し

しり首級とぬきり

うりちふ十六騎乃紐取ゆちあり

河し母七歳信玄乃家老山縣

うら若来守友が勇と感一山縣氏
と授且若来の腰紐とあふ
天正二年丙辰源兵衛の友後河守
家人若来と守友一属せらる
小笠原と八郎を列言て非の儀
一若来勝頼をいれをこむ守友
後河守の脇塚のあひひよる若来入
あひひよる勝頼我切と感一後河
版田八和郷の内一とひく作地を

後河守のうら若来一いんく

定

一版田の内

貳百貫文

一若来の内

百貫文

近年若来後河守を列言て陣云切若
来若来不知不謝のて度言天神
属自若来と志を列言て
眼若来と若来若来若来若来若来
勝頼若来若来若来若来若来若来

女件

天正二年 戊甲

七月廿一日

勝頼を判

山縣若志兼門尉友

日之五廿月廿一日之列長藤了

とひくは

大権現也勝頼公我のとき守友若志兼

山の城了あや沼井の清射了

とせし年の割らるる夜の割よるる

数度合我一味乃本戸の脇了

とひく我死す少く三十八

女子

後河原の清若新妻乃神職佐田下

中村氏近の盛昌貞の妻 三枝清右衛門

若勝の母

守名

宗四郎 加平次 彦若菜 生玉甲斐
二歳少く父少く行方故小伯父
昌右陣代少く家
天正十九年 奥列 定く澤り

大権現了 一 謁 一 予今ま月日
文禄元年 名護屋陣 上 修 末

守重

宗四郎 云佐守 生玉下野
彦長十

名護院殿了 一 謁 一 予今ま月日
同十九年 大坂陣 了 修 末
翌年 彦若陣 了 一 井 上 重 平 以
植村おね 同 細 分 守 之 宅 跡 彦 若 末
牧野 又 十 郎 酒 井 下 総 右 衛 門 同

涉馬乃左太小侍守

元和二年 乃左太小侍守

乃左太小侍守

同九年 乃左太小侍守

人繼の功となす

寛永三年 乃左太小侍守

同年十二月廿四日 乃左太小侍守

叙一云 乃左太小侍守

同十年 乃左太小侍守

同十二年 乃左太小侍守

女子

小菅八左衛門尉妻

守知

平六 乃左太小侍守

乃左太小侍守

守信しゆんしん

十菴

守教しゆきやう

石近いしん

生玉山城なまたまやまじょう

將軍家しやうぐんけ一いち行ゆき久く末すえ子こ

女子むすめ

天方あまがた馬ま妻さい

女子むすめ

堀田ほりだ氏うぢ妻さい

守秋しゆあき

宗四郎むねよしろう生玉なまたま菴あま

寛永十八年かんえいじゅうはちねん

將軍家しやうぐんけ一いち端はな子こ氏うぢ

女子

國名

又市郎

生玉同家

女子

國綱

新十郎

生國同家

守義

源公事尉

生玉甲斐

天正之乙丑月長藤合我乃河陽親乃

麾下下下下下下下下下下下下下下下下下

三十六

守秀

源十郎

武列 忠村の城合戦の足見戦と

守廣

平菟

女子

三枝右衛門尉妻

源菟と英の養母

なる也

昌名

源八郎 平右衛門 去依鳥 生玉甲斐

武田信玄としば 勝頼よはくもむく

軍切あや

天正十年甲列没落のち甲列

市河よとひくもむく

大信現を指し ちまうつらうのち

父の遺志を継ぎ ちまうつらうのち

らふ

同十一年 佐列 小室 共とあけて 叛
人 権現 共を 小室 一 佐列 共とあけて 時
佐列 野町 甲列 小室 一
一 系乃 通治 一 佐列 一本
一 相本 一 故 一 相本
一 共とあ 一 教友 野町 一
一 燒 一 一 甲列 共小室
一 一 通治 一 一 共とあ

味方乃 佐列 議 一 一 一

相本 共 野町 一 一 小室 一

一 一 共 一 一 野町 一

一 一 一 一 一 昌名 一

一 一 一 一 一 野町 一

一 一 一 一 一 昌名 一

一 一 一 一 一 進み 一

一 一 一 一 一 陣 一 一 一

敗少とけ河昌名河中より馬を
之へ一進みきくひ款首と地強
熾とよそとあむくあれと付るを
くか款首拒とらとよとれ救すま
回十八と小田原陣よは
大指現認軍小若くろしましく早
小田原の共と生捕城中の奇謀と
そふる一とやわ昌名山下原大吏
を認起し一はかりあれとよとけの

しつり一とむつ一と根の山中
とひく小田原の共一人と捨り
あれと執す
大指現よりこよせをまひと認の
一けあきとねと
大指現首を忠薬一とはかり一はかり
平忠と平次と曰 治とけをむり
忠薬の城とよとみとれをせじ
昌名とつと軍と励しすみ

穰多世編と糸江敵共城とあてて
きく味方勝り糸出り大室
出編の門の内へせめ入は死味方
とします昌名総軍と合へて
武備とあり高きふらに
以て傷さ血流く眼へ入は
昌名とていけくあてては時
昌名が甥源十郎きくひ死とあ
信等おやく敵共を討捕あつひを

うら死ふりあつひを敵とてあ
うのうら本多依波とて
ひうふうとあつひと野内と和
りうらひ一万ふり地とあ
あまのうられあつひ昌名故あつひ
かこつひれと詳し
同十九年奥列沙陣とあ
文禄元年三月あつひ朝鮮國を
征とつひ

大指現肥列石護屋よ玉りきしまふ
河へ ばりせよよらきく空人
城裏とつとむ

交長五五

大指現徳ゆを率く奥列系勝と征
せんゆく七月野列小山
陣也るりきまふはら記まこ佐列
志田若をわけくくし

名護院敵徳軍と率く志田城

いひやきまふ昌名守昌あれよき
ひききまふ河へ味方先きの
足将志田共と挑きかひ始雄い
まふ決せず 名命くよらき
屋代越中も正秀と先子よすみ
討くあれと志る共く敵共ふせく
ことわくしえずく敗走と

同十九年大坂陣の河 鉤命を
くく志田若共志田城

とつてし

同其年秀頼大坂の城に浪人

まのきあつめ再謀叛とけり

名徳院殿よりきこひききてまづ

沙羅をりしとてしきき名命

よりしき守昌父の節候と率

名徳院殿の信をりし列也

同八年 鉤命よりしきて父子

せもりし後河大納言忠長より

けふよりり

名徳院殿の命よりしき河内守列

小室の命をばし

寛永元年六月九日より病死

しき七十五 清和元年

名親

監物

女子

津合又十郎が妻

守次

長月

忠長マア一了

守里

七月

忠長マア一了

守光

甚右衛門

天正三年五月之別長藤公義乃
也さ武田勝頼下
うら死也一十六

女子

三枝左衛門尉守名之妻

三依守

守名之母

守昌

保八郎 勘解由 生国甲斐守

文禄二年一とド〜

人権現とよび

名瀬院殿と稱し〜

九歳うららち

名瀬院殿より〜

〜とよび

長女とよびに列馬田沙陣よ父と

〜に侍

大坂西陣よ侍〜

〜高〜

捕大坂西陣の〜

同十六年同十一月廿九日病死

少一 守中 法石宗悦

父昌台

大権現より白きまゆふころ乃の御証文

永永平御書敷通わるといふ

寛永十四年一回福乃笑よかり

てことくく焼失と

女子

喜山老女門の妻

女子

小菅大守の妻

守秋

新九郎

名瀬院殿より一紙へ寄るまじり

大坂あゆ陣より信を

系

早世うせ

女子

海野えの市助の妻

守盛もり

新あらた助 平右衛門

天文長十八年あまのなが

名徳院殿なとくゐんとよび

為家ためいえよ飛騨とて一いつきそきそままりりか

ううららちち後ごらら世よととよよははるる

寛永十三年かんゑいののううらられれ〜

為家ためいえとと相あいいまますすままつつのの所ところ比ひと

そそままりり

守勝

源八郎

内通以

母八返訪肉懐る

新水が女

元和六年

名瀬院殿

将軍家一々祿賜一きてまつれ

寛永十三年九月

将軍家と相一々一々一々一々一々

同十六年守昌率志くらの家督

とほぐ

於増

返訪源十郎 勅旨奉尉 母八返

亦祖父乃氏と一々一々一々返訪

称と

元和六年

名瀬院殿とよび

將軍家と相しきくまの系

寛永十五年九月

將軍家より福しきくまの系

同十六日父没しころらぬ地を

きまふ

守定

長七郎

寛永九年七月よるす

守正

保八郎

寛永十一年十二月よるす

守秀

大藏

寛永十五年八月よるす

女子

家乃紋いぶき水色みづいろ之枝松えだのまつ二川ふたがわ也

三枚

某

右邊尉

生正甲斐

天正十年甲辰没落乃

大指現了

七十之歳少

法名榮富

守英

源義 生必回あ

天川平うら子なる也平うら

右近の尉の部なる也

いとさかた河より右近の尉よや

なりもふこれよと申す天川を

わ〜〜〜〜之枝氏と申すなり

甲列没落の〜〜〜を列漢松よとひて

禮人となす

大指現〜〜〜は久き〜〜〜なる也

所とあ〜〜〜の〜〜〜方〜〜〜沙使〜〜〜け

き〜〜〜る終へ大番を〜〜〜る也

絶と申す

天正十二年長久の沙陣の〜〜

首級を得たる也

翌年美田沙陣の〜〜〜いよ〜〜

〜〜〜底と〜〜〜なる也

同十八年小田原沙陣に修す
翌年奥列沙陣よまらひきて
まつり守放まらひつる系
文禄元年羽解征伐のとき修す
一 名護屋よりつる系
交長立子開原沙陣の河上渡に
て加賀能く成中よりつる系中
乃禰とうらひ名く海軍を列白
次がよら

大指現より福一きくまらひ
玉如こころあき名と云と
垂より修す一開原よら系
沙海陣のとき 鉤命とけを
しりく大坂よりつる系よか
と系落人とか考らるるち和列
芳野郡乃代友を おせつけれ
いまの地をえりつる系内
石列乃代友よりつる系内

うぶき海に

翌年六月乙未列侯田よとひて千

石の地とくりへきま河小大の保を

守英と徳すりてとて乙未の

代友のひりか増の地千と

かこれに列の代友とつとひて

昔命とけき海に

まら病のかりり

かすすりり大坂あ津陣の河

と樂りりりりりり

名瀧院殿とよび

為家一りりりり

寛永十五年七月病死

七十四 法名や

守信

八郎左衛門 生國武苑

寛永十二年

將軍家了ら一ら謁ら一らきらくらまらるら系ら

日十五ら子ら十月家督らとら継ら本ら地らをら

一ら大ら毒らをら治らすら心ら

家乃致三校松

● 守友もりとも

勅命ちくめい申まを左ひだり集あつ

生なま正ただ甲かみ斐ひ

三さん枚まい

守古もりこ

長なが考こう

生なま國くに同どう前まへ

之十七

法名玄宿

昌貞父名秋の猶昌也祖父為監美安
後河清君新文の家と姓

家乃紋三枚松

并

九月三日

中村家乃紋柏系二枚透

系

野呂のろ

三枝姓乃いしめ守まう子守將のろのすけ
野呂のろと稱すす

石巻の尉

生國伊勢いせ

伊勢いせの國司こくしより病ひやう死しす

友京ともけい

若末尉

生國同前

伊勢の國司いせのくにすけ

正京ただけい

松まのの座ざ

大権現おほごんげん

一いははままつつをを駿すま列りょう之の枚まい摺ずり

一いははままつつをを死しすす一いははままつつをを死しすす一いははままつつをを死しすす

法名定念ほふなごんねん

守京もりけい

若末尉

生國同前

大権現おほごんげん

一いははままつつをを死しすす一いははままつつをを死しすす一いははままつつをを死しすす

真京まきやう

文右衛門

生國遠江こゝろのくに

名徳院殿なとくゐん

お茶の味

家の紋章のころ勝の一字

